

デザインチームの活動と展示会出展を通じたデザイン教育の実践研究

PLACTICAL STUDY ON A DESIGN EDUCATION THROUGH DESIGN TEAM ACTIBITIES AND TRADE SHOW PARTICIPATION TITLE

田頭 章徳 芸術工学部プロダクト・インテリアデザイン学科 助教
見明 暢 芸術工学部プロダクト・インテリアデザイン学科 助教
山本 忠宏 芸術工学部まんが表現学科 助教
小北 光浩 元・芸術工学部ファッションデザイン学科 助教
池内 宏行 芸術工学部プロダクト・インテリアデザイン学科 実習助手

Akinori TAGASHIRA Department of Product and Interior Design, School of Arts and Design, Assistant Professor
Nobu MIAKE Department of Product and Interior Design, School of Arts and Design, Assistant Professor
Tadahiro YAMAMOTO Department of Manga Media, School of Arts and Design, Assistant Professor
Mitsuhiro KOKITA Department of Fashion and Textile design, School of Art and Design, Former Assistant Professor
Hiroyuki IKEUCHI Department of Product and Interior Design, School of Arts and Design, Assistant

要旨

”Design Soil”の活動に参加したメンバーへのヒアリングを通して、1. 厳しい批評が学生を成長させる、2. チームでの実践的な経験が学生を成長させるという仮説を検証した。

仮説1. について、「厳しい批評で慢心が打ち砕かれたことと、それがあつたからこそポジティブな反応が心から嬉しく、自分に自信が持てたこと、両方を経験できたことで成長できた」等の意見があり、厳しい批評をされる場に挑んだからこそ成長ができたということが確認できた。

仮説2. に関して、作品を出展した学生からは「出展できないことが決まった友達が、自分の制作を手伝ってくれたり、チーム運営に徹してくれている姿を見て力が湧いた、絶対にいいものを作るという強い意志を持てた」という意見が、出展ができなかった学生からは「ひとりであれば、出展できないと決まった時点で終わるが、チームだからその先があり、能力だけでなく人間的にも成長できた」という意見があり、チームでの活動が学生の成長に大きく関わっていることが確認できた。

Summary

Through interviewing students who took part in activities of Design Soil, I verified hypotheses that 1. Good criticism makes students grow bigger, 2. Hands-on learning experience as a member of a team makes students grow bigger.

Regarding hypothesis 1, some students said “My pride has dented by good criticism, and this is why I was really glad of positive reviews, and then I become convincing to myself. I had been able to grow by those both experiences.” Those cases prove the hypothesis 1.

Regarding hypothesis 2, some students who exhibited their own work said “member who has rejected gave a hand to help me or worked hard for the team in their own way, its made me energetic. And it made me have a strong will to complete my work for them.” And some students who did not exhibited said “If I was individual, my challenge was ended when I was rejected. But if I was in a team, it is continue. I have deeply grown in faculty and as a person.”.

Thus, it is confirmed that team activities influence a student's development.

1) 背景と目的

本研究では、これまで研究対象としていた「Design Soil」を引き続き対象とし、研究期間を通してデザインチームとしての活動と質の高い展示会出展を実践する。これと合わせて、「Design Soil」の活動に参加した学生(卒業生を含む)にインタビューを中心とした追跡調査も平行して行い、仮説 1. 厳しい批評が学生を成長させる、仮説 2. チームでの実践的な経験が学生を成長させる、ということについて実証する。これらを通して、デザイン業界で必要とされる「生きる力」を持った人材の育成をしていくための教育プログラム、組織作りとその運営について体系化することを目指し、デザイン教育の質の向上に繋げる事を目的とする。また、チームの経験を他の学生に還元し、大学全体としてデザインの意欲や質の向上をしていくために、ワークショップや学内での展示会なども実施する。

2) 研究方法

Design Soil のベースの活動として、2015年4月のミラノサローネ期間中に開催される VENTURA LAMBRATE 2015 への出展、その後の秋の東京の展示会への参加を目指す。これらの展示会出展を軸として継続的な活動を行っていく。27年度も、26年度と同様に4月のミラノ、10月の東京の展示会への出展に加えて、出展作品の学内での展示会や報告会も行う。さらに、選抜学生、選抜学生以外の学生も対象としたレクチャー、リサーチプロジェクト、作品制作を行うワークショップなどを実施して、成果と経験を還元する。出展学生、選抜学生にとっては経験を定着・昇華させる機会とし、選抜学生以外の学生に対しても意識の向上、デザインスキルの向上を促せるように努める。展示会出展を通して研究の受託も進め、より具体的な商品開発への参加の機会を創出し、研究助成による「展示会での発信」「ワークショップなどでの学び」と合わせて、受託研究による「企業との商品開発」まで包括した、深度のある教育プログラムへと発展させていく。

今年度は、Design Soil で活動してきた卒業生を含む学生に対して、ヒアリング等の追跡調査を行い、教育プログラムとしての Design Soil の活動の評価も行う。

3) 活動の概要

2015年4月にミラノで開催された VENTURA LAMBRATE 2015 に出展を果たした。今年度は、各国の大学が展示を行う「VENTURA ACADEMIES」という枠での出展となった(写真1)。今回は、「Boundary (境界)」というテーマを設定し、ものどもの、空間と空間などの境界で起きていることに注目し、そこからアイデアを展開して制作した作品9点を展示した(写真2)。

帰国後、5月に新メンバーの募集を行い、6月には神戸芸術工科大学キャンパス内のウッドデッキ広場で報告会を開催した。10月から開催される東京でのデザインイベントへの出展を計画していたが、適切な展示会が存在しなかったため、今年度は東京での展示を見送った。



写真1 VENTURA ACADEMIES での展示風景



写真2 VENTURA ACADEMIES への出展作品

4) 活動の成果

今年度の大きな動きとして、スウェーデンのヨーテボリ大学クラフト・デザイン学科 Steneby 校(HDK Steneby)との連携がスタートしたことが挙げられる。Design Soil のミラノサローネ出展がきっかけとなり、2013年度より交流を始めていたが、今年度の展示を通して、本格的な連携プロジェクトが動き出した。また、日本の家具メーカーである伊千呂との商品開発プロジェクトも本格的に始まった。これまでは、ミラノサローネ出展を目指す活動とは別に並行して実施していたが、2015年度は一体化させて進めることとなった。もうひとつの商品開発プロジェクトとして昨年度より動いていた株式会社アダルからは、Design Soil のメンバー学生がデザインした商品が新商品として発売された。

また、在学中に交換留学で海外の大学に行った学生と、卒業後に留学した学生からは、「現地の学生に自身の作品を紹介したところ、多くの学生が雑誌などのメディアやウェブサイトを通して、すでに作品を知っていた」、「留学先の大学の授業で、優れたデザインの事例として Design Soil の作品が紹介されていた」など、Design Soil の活動の注目度の高さを知るエピソードを聞くことができた。

5) ヒアリングによる仮説の確認

Design Soil の活動の成果を確認すべく、仮説 1. 厳しい批評が学生を成長させる、仮説 2. チームでの実践的な経験が学生を成長させる、ということについてメンバーとして参加している学生と、メンバーとして参加していた卒業生へのヒアリングを行った。ヒアリングを行った学生・卒業生の多くがまず挙げたのが、それまで知らなかった世界を体感したことによる意識の変化である。「雑誌やウェブサイトなどを通して、海外のデザインシーンやミラノサローネのことを知ってはいたが、実際にその場に行き、作品の実物を見ることや、展示の空気感や街の雰囲気を経験することは、全く別次元の衝撃だった」と話している。

仮説 1. について…ある卒業生は、作品出展はせずに出展する学生のサポートとしての参加と、自身の作品を出展しての参加とを両方経験しているが、「デザインに対する

新たな知見の獲得や、自身の作品やデザインへの取り組み方に対する厳しさ、Design Soil というチームへの責任感といった意識の向上に関しては、作品を出展していなければ得られない部分が大きかった」と語っている。また、「実習課題であれば教員、企業とのプロジェクトではクライアントである企業の方や行政の方などの意見は得られるが、デザインを見る目が肥えた膨大な数の方々に、様々な視点で作品を批評してもらえる場合は比べ物にならない価値があることが実感でき、この経験を通して自身の作品をつくる際のハードル設定やモチベーションが飛躍的に上がった」という意見も得られた。

社会に出てデザイナーとして働いている卒業生からは、「近年、大学での教育から良い意味での厳しさが無くなってきているが、最高峰の場でプロのデザイナーも晒される批評のレベルを体感できたことで、社会に出てプロのデザイナーとなってから、あまり戸惑うことなく付いていくことができた」「厳しい批評で慢心が打ち砕かれたことと、それがあつたからこそポジティブな反応が心から嬉しく、自分に自信が持てたこと、両方を経験できたことで成長できた」と話していた。まさに、厳しい批評をされる場に挑んだからこそ成長ができたということが確認できた。

仮説 2. について…「アイデアを出していく段階でのブレインストーミングやディスカッションなどのグループワークのフェーズで他者の存在が刺激や助けになり、よりよい成果に繋がった」という意見も多く得られたが、学生たちがより成長に繋がったと感じたのは、メンバーがふるいかけられ、出展できるメンバーが絞られていく過程以降だった。「自分が Design Soil の看板を背負っているというプレッシャーはきつかったが、だからこそ頑張ることができた」という意見からは、Design Soil というチームのブランドの存在が成長に繋がったことがうかがえる。

Design Soil では、作品出展が叶わなかったメンバーはその後、展示構成や出展するメンバーの作品制作のサポート、展示什器などの展示に関わる制作物の制作などを担っていく。「出展できないことが決まった友達や、とても悔しいだろうに自分の制作を手伝ってくれたり、相談に乗ってくれたり、チーム運営に徹してくれている姿を見て力が湧

いた、絶対にいいものを作るという強い意志を持てた」と感じたメンバーも多数おり、チームでなければ得られない経験が成長に繋がっている。また、出展できなかったメンバーについても、「出展できなくなってチーム運営に回ったことで、全体を見渡して考え、行動することを学べたし、その面白さを知ることができた」「社会に出てからも起きる状況を経験できたことは大きかった」「ひとりであれば、出展できないと決まった時点で終わるが、チームだからその先があり、能力だけでなく人間的にも成長できた」という意見があり、チームでの活動が学生の成長に大きく関わっていることが確認できた。

6) おわりに

Design Soil の活動を継続していることで世界的な認知度が上がっており、よりよい批評を得られる状況も生まれてきている。そうして得られる厳しい批評が学生の成長を促すということ、チームでの活動が個人の成長にも大きく影響していることがヒアリングを通して確認できた。引き続き活動と研究を継続し、実践教育の方法論に繋げていきたい。